

## 高砂の工楽松右衛門と淡路の高田屋嘉兵衛

### ○高砂の工楽松右衛門(くらく まつえもん)(初代 1743-1812)

工楽松右衛門(初代 1743-1812)は、播磨国加古郡高砂町(高砂市)で漁師の子として生まれ、20歳頃に兵庫津・佐比恵町の御影屋平兵衛に奉公しました。寛政4年(1792)までの間に独立し、兵庫津では御影屋松右衛門として廻船業を営み、蝦夷地や日本海沿岸、瀬戸内各地などで買積船商(寄港地で安いと思う品物があれば買い、船の荷物で高く売れるものがあればそこで売るという商売)を営みました。廻船業とは別にエトロフ島での築港や船の帆布(はんぷ)などの改良に功績があり、松右衛門は元の姓は「宮本」でしたが、蝦夷地の土木事業の功績で、享和2年(1802)、幕府より「工夫を楽しむ」ということで「工楽」という苗字を賜りました。文化5年(1808)からは姫路藩の要請で高砂港の川浚えや新湊の造成、文化8年には備後福山藩領の鞆(広島県)の波戸築造などを行いました。文化7年(1810)に高砂に居を構えました。大蔵永常は『農具便利論』(文政5年刊)の中で、松右衛門の事績を紹介しています。(右上写真:高砂神社にある工楽松右衛門の銅像)



### ○高田屋嘉兵衛(たかだやかへえ)(1769-1827)

高田屋嘉兵衛(1769-1827)は、淡路国都志本村(洲本市)で百姓の子として生まれ、寛政2年(1790)に兵庫津の堺屋喜兵衛のもとで樽廻船の水主として働き始めました。その後寛政10年頃までに辰悦丸を入手し船持船頭となって独立し、西出町の店を本拠に箱館(函館)に出店しました。その後、享和元年(1801)に幕府の蝦夷地御用定雇船頭となり、幕府の蝦夷地政策に深く関わっていききました。幕府は蝦夷地を直接経営するにあたり、工楽松右衛門や高田屋嘉兵衛などの新興商人を登用しました。そのような中で、高田屋嘉兵衛は、文化8年(1811)~10年にかけて日露間紛争となった「グローニン事件」に遭遇し、ロシア・カムチャッカへ連行されますが、やがて紛争解決に貢献します。幕府役人に捕らえられ幽閉されたロシア船ディアナ号艦長グローニンは、ロシアに帰国後、1816年に『日本幽囚記』を著し、ドイツ語に翻訳され、さらにイギリスやオランダなどでも翻訳出版されました。この中に高田屋嘉兵衛が肖像画(上の図左)入りで紹介され、嘉兵衛は当時ヨーロッパで一躍有名になりました。



グローニン事件で体調を崩していた嘉兵衛は、文政元年(1818)に郷里の淡路へ戻り、郷里の発展に寄与しました。また、嘉兵衛は文政7年(1824)に兵庫津西出町の鎮守稲荷神社に燈籠一対を奉納しています。近くに高田屋嘉兵衛本店跡があります。



### ○兵庫津での工楽(御影屋)松右衛門と高田屋嘉兵衛

高砂の工楽家には、約8千点に及ぶ文書資料が伝わっており、それらからは、兵庫津での工楽(兵庫津では「御影屋」を名乗る)松右衛門と豪商北風荘右衛門家や高田屋嘉兵衛らとの関係が垣間見られます。高田屋嘉兵衛は、松右衛門より26歳ほど若いですが、廻船問屋に奉公しほぼ同じ時期に独立しました。嘉兵衛には金蔵、嘉蔵の弟がおり、嘉蔵は松右衛門との関係が深く、その関係を示す様々な史料が残されています。また、嘉兵衛の親族と思われる高田屋善三郎が松右衛門の手船の貞宝丸の船頭となっています。高田屋嘉兵衛は晩年淡路に戻りましたが、2代以降は箱館を拠点としました。一方松右衛門は晩年兵庫から高砂に拠点を移し、2代目松右衛門も高砂を拠点としています。

司馬遼太郎『菜の花の沖』は高田屋嘉兵衛の生涯を描いた小説。その中で松右衛門は嘉兵衛に「松右衛門旦那」と呼ばれ、豪快で、旧習にとられない男として登場します。以下出会いの場面。

松右衛門旦那はほどなく箕圍いから出てきて、それが目的であるように、嘉兵衛に近づいてきた。嘉兵衛はあわてて船の上から降りてくると、松右衛門旦那のさびた声が耳にとどいた。「嘉兵衛さんかや。お前は、おもしろい男じゃというな」松右衛門旦那の声は、からーん、と空に吹きぬけてゆくような響きがあった。「おまえは船がおもしろいか」松右衛門旦那は船上にのぼって、船体をなでながら、嘉兵衛にきいた。嘉兵衛はすこしあがっていた。人間としての品格が、いままでみたどの人物ともちがっていた。「おもしろうございます」

寛政11年(1799)幕府は蝦夷地を仮直轄とし、会所を箱館などに置いて、幕府自らが直接経営する制度をとりました。初代松右衛門は寛政2年(1790)に幕府の要請で蝦夷地のエトロフ島に波止場を築造し、その労で松右衛門に金30両が与えられた古文書が残されています。高田屋嘉兵衛は、享和元年(1801)に蝦夷地御用定雇船頭となり幕府の蝦夷地政策に深く関わっていきりますが、松右衛門の蝦夷地との関わりの方が、嘉兵衛よりも早いです。

### ○「松右衛門帆」の発明と兵庫津での生産と販売

兵庫津の御影屋平兵衛のもと船乗りとして働いていた高砂出身の松右衛門は、改良を重ね木綿でできた「松右衛門帆」と呼ばれる丈夫な「織帆」を天明5年(1785)頃に発明しました。製織場を兵庫津の佐比江町と播磨二見(明石市)に設け、兵庫津の船具商人喜多二平がその販売に尽力しました。喜多二平は、兵庫津の豪商北風荘右衛門家から最初のにれん分けされた商人で、北風家や他の廻船問屋もその帆布の普及に努め、瞬間に全国に普及しました。帆の強度が増したことで速度が増すなど、この帆が弁財船等の輸送能力をアップし、海運の発達をもたらしました。【参考文献】『特別展 江戸時代の兵庫津』(平成28年 兵庫県立考古博物館)など

